

---

# 天地無用 G X P 山田西南に転生

神代ふみあき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

天地無用GXP 山田西南に転生

### 【Nコード】

N8078Z

### 【作者名】

神代ふみあき

### 【あらすじ】

GXPの西南に転生した主人公が、俯瞰知識をつかって平和に生きてゆこうとしたものの、実際には周囲に被害甚大。そんな話です。

## 第一話（前書き）

予告させていただいた転地無用GXPの二次です。

天地、なのに違和感。ねえw

わりと流して書いていきますので、お楽しみいただければ幸いです。

## 第一話

見上げる空や周りの風景を見ると田舎にしていることを理解する。

多分俺は一度死んでる。

それが理解できるということは、誇大妄想癖か凶人が越人だろう。一応、自分が正常だという観点でみれば「越人」であってほしい。加えるなら、自分の名前が「山田西南」であるという事実も、なんとかならないだろうか？

いわゆる、不運の超新星みたいな人生は、いささか遠慮したいんだが。

紛れもなく山田西南であることが理解できた5歳の春。

もう、ぐれちゃおうかなーと言うことで、放置自転車で爆走しているところで競ってくるバカ発見。

これはもう、峠道でゼロヨンチャンプっきゃねー！ ということで、自分の運の悪さを忘れて攻め込んだところ、一緒に橋の崩壊に巻き込まれて河に転落。

なぜか二人とも無傷だったけど、迎えにきたお母さんに怒られた。とはいえ、ヤツとは共に死線を潜った仲と言うことで真の友、真友となった。

正木海、実は男の中の男だった。

はじめは無防備に巻き込まれていた不運にも、弱点を発見した。

そう、いろいろと危険を予知することで、かなり避けることが出来るんだ。

すげーぞ、おれ、かつこいい！

というわけで、いろいろと家の中の強化やら靴の修理やら鞆の修理をして、帰る道やら行く道を検討しきってじゃないと動かない癖を付けたら、それはそれはかなりの効果。

ふあっふあっふあ。

まあ、自分の不運にけりが付いたし。

あとは死亡要因満載なGX Pに関わらない？

いやいや、結構ハーレムだし、がんばっちゃうかもしれないよ、俺。

・・・うん、じゃあ別の角度で介入だな。

まずは鷺羽<sup>マインド</sup>に目を付けられないようにすることと、霧恋さんに妙な罪悪感を抱かせないこと、これが目標。

がんばるぞー！

真の友、海の紹介で、なぜか柁木天地先輩と知り合う。

たまに田舎に帰ってきているという天地先輩と遊ぶこととなり、鬼の遺跡の前でもよく遊んだ。

というか、あの視線、魍呼さんだよなあ・・・。

そんな天地先輩も岡山市内に引越したはずなのに、いつの間にか神社のそばまで戻ってきていた。

「いやー、いろいろあって、戻ってきたんだ。またよろしくね」

苦笑いの天地先輩。

そんなわけで、俺は、いや、僕は、榎木家の資材搬入係という山田家内バイトを開始するついでに、榎木家にちよくちよく遊びに行くことになった。

一番に仲良くなったのは魍呼さん。

なにしろ向こうさんにとっては初対面ではない。

こつちも、別の知識があるので親近感がある。

だから気を抜いて空を飛んでいてもスルーしていたんだけど、榎木家にいろいろと住人が増えてきたあたりの冬に正体を明かされた。

「・・・つまり、魍呼さんもみなさんも、みんな宇宙人？」

「そういうこと、なんだなあ」

「ササミちゃんも？」

「そ、ササミも宇宙人」

「へえ、もつとなんか高貴な感じに思えますが・・・」

「さすが西南さん、私とササミは、宇宙の中でも古式ゆかしき高貴な王家、樹雷の王族なんです」

「・・・そんな高貴な方が、なんでこんな山奥に？」

「それは・・・」

まあ、知ってるけど、その辺を素人と言うことでつついたら、いきなり地域紛争が開始された。

うんうん、生身じゃ死にそうです。

榎木家ではいろいろと事件はあったらしいんだけど、遊びに行くうちに榎木家の空中温泉やらトクメ鷲羽研究室にまで案内されるようになって、すでに内弟子状態だった。

何でだろうね？とおもっていたけど、どうも天地先輩が僕を気に入ってくれていて、宮司さんとの修行にもつきあわせているからと言う理由らしい。

はじめは祭りの奉納演舞の練習につきあっていただけなんだけど、最近では人間技じゃない方面もつき合わされていたりする。

いや、なんつうか、僕にもできていた時点で、トクメ鷲羽の魔の手がいつの間にか入っているんだろなあ、うん。

のんびり過ごしてしまった弊害か、いつの間にかあの時がきた。そう、樹雷皇来訪。

僕が気づいたのは、天地先輩と天南さんの決闘の時。

ふらふらつと遊びに来たらその現場だった。  
ふつうは入ってこれないんだけどね、と鷺羽スズクの台詞だったけど、  
入ってきたその場は、あの舞の時だった。

それは洗練されていて美しいものだった。

あんな舞ができる人が弱いわけがない。

そう、美星さんの横やりがなければ、絶対すごい事になっていたはずなんだ。

だから、僕は滑り込み土下座。

結果、勝敗は決しているけれど剣の勝負はみたい、皇の名において再戦が命じられた。

予想を超えて美しい戦いに、多くの人間が感嘆の声を上げ、この勝負をみられたことを感謝した。

勝敗は天地先輩の勝ち。

ただし、氷箔の勝利だった。

その後の原作にはなかった宴では、樹雷の人たちにすばらしい勝負をみさせてもらったと、なぜか僕が感謝され、樹雷皇にも感謝された。

加えて天南さんにも感謝され、なんだかくすぐったいくすぐったい気持ちにさせられてしまった。

この時気付いたんだけど、ゼロの介入はなかった。

つまり、これはやり直しの時間なんだろう。  
うん、なんか変な気分だ。

原作に巻き込まれた僕は、例のミサオちゃん事件でも完全に巻き込まれてしまい、いつのまにやら天地ファミリーに数えられてしまった。

そんなわけで、怜亜さんの結婚式にも参加してしまった。

ただ、あのおなかの中にいる少年が、剣士君かと思うと、思わず同情。

うん、あれだね、

「人柱、か」

と、つぶやいてしまった瞬間、三神と怜亜さんに拉致られました。やっべー、ぼろが出た、と後悔していたところでの尋問で、僕が、この世界の俯瞰記憶があることが知られてしまった。

「・・・まさか、そんな事実あるはずもない！」

「ですが、彼の記憶、というか彼の話には整合性があります」

「そうだね、信じる他無いようだね」

というところで、俯瞰記憶の書き出しやら照合に熱心な女神様たちはさておき、じっと自分のおなかをみる怜亜さんにほほえむ。

「彼は、とても幸せだと思えます。良き友、良き仲間、そして冒険の大地。彼には得難い新天地です」

「・・・ありがとう、西南君」

というわけで、料理洗濯サバイバルに剣術体術薬学構造学等々が全力でたたき込まれていたことを話すと、怜亜さんを初めとした女性陣がニヤリと笑った。

「知識はアタシかね？」

「家事はわたしとササミが」

「戦闘は我が指南しよう」

「」「あはははははは」「」「」

すまん、まだ見ぬ少年よ。

君の未来は今決まった。

## 第一話（後書き）

というわけで、一話目でした。

## 第二話（前書き）

わりと原作にかぶさっている部分は流しますW

## 第二話

てなわけで、岡山で巢を構えることになった怜亜さんはさておき、僕は鷺羽トリスによる調査の日に放り込まれることになった。

で、そのなかで、鷺羽トリスが「アストラルコピーさせて」といつてきた。

「あー、それはやめた方がいいと思いますよ？」

「それって、俯瞰記憶的な意味でかい？」

「はい」

んー、と腕を組んだ後、鷺羽トリスは「とりあえず、ネットワークから隔離してとってみるわ」と、システムをスタンドアロンにしてアクセスすることに決定。

「でも、鷺羽ちゃん。柁木家で万全はないでしょ？」

「あー。一応高次元に移動してテストするから」

にやっとわらった鷺羽トリスの顔が凍り付いたのはその後一時間後。

縦横無尽に鷺羽トリスシステムを破壊し尽くしたアストラルコピーは、外線で食事の時間を告げる美星さんの通話回線を乗り越えて、銀河ネットワークの荒海に飛び込んだのだった。

「あああああああー！」

僕と鷺羽トリスの悲鳴を背に、悪質なウイルスを感染したまま、銀河の海を渡りきったコピーは、なんとアカデミーのセキュリティサーバーをぶちこわし、保存されていたアーカイブの20%を消し去っ

た。

むろん、周辺ネットワークも壊滅的なバグが発見され、いままで背後で裏取引をしていた幽霊会社や海賊たちが一斉検挙されたのはご愛敬だろう。

この事件の発信元が伝説の哲学士であるところの鷺羽<sup>トリス</sup>であり、彼女が健在であると表裏に知られたのはこれ以降お話。

で、第一級秘匿事項である天地先輩の名前が出ないせいか、「鷺羽<sup>トリス</sup>の秘蔵っ子」という実のない字が、密かに僕へに付いて回る事になったらしい。

そんな噂ともなれば、早々に動くのはアイリ姉さん。

この際だからアカデミーに来ない？ とアンシブルで勧誘がきた。

僕もいろいろと悩んだけど、やっぱり前に出ることにした。

だって、男の子だもの。

そんな流れのせいで、早々にGPへ送られることになった西南であるが、当然のように大量海賊捕縛に関わり、っそしてリヨウコ＝バルタとも出会う。

原作っぽくランダムジャンプで海賊を集めてしまい、加えて瀬戸様と対面。

ここで「脅し」が入るはずだったんだけど、すでに鷺羽ちゃんやら樹雷皇の推薦があるため実行されず。

が、一枚かみたい瀬戸は、推薦状を自分の名前で追加した。

伝説の哲学士に樹雷皇族二人の推薦つてどんな嫌がらせだ、と内心は絶叫した僕だけど、おくびに出さないことに成功した。

美星さんのお母さんの迎えでは再びまずいだらうということので、GPから迎えの増援が入った。

この際迎えにきたのが霧恋さんと雨音さん。

既に柁木家の身内扱いである西南とは顔見知りの雨音さんは、かなり僕を気に入ってくれているみたいで、僕がGP学校に入るなら合わせて教員に転出するとまで言うてくれている頼りになるお姉さん。

霧恋さんは既に送迎任務後の移動先としてGP学校の教員として移動提出済みだとかで、内示も受けていたりするのが手早い。

そういえば、むちゃくちゃ海賊が集まってたなーと考えてみたんだけど、どうも宇宙に出た時期の差が出てることに気づいた。

規模の差は、僕が宇宙に出た時期が海賊最盛期の頂点時期であり、これから樹雷による掃討が開始されますよ、という時期に合致したという偶然故だろう。

偶然というレベルでは運の悪さが鼻につくけど、今後のことを考

えれば多く始末できたと考えるべきかもしれない。

そんな前向きな西南の所行で、鬼姫の金庫番こと「立木林檎」の感謝ゲージは振り切れることになる。

国家予算どころか瀬戸の活動用資金、さらには諜報用の裏資金まで一度は空にする心算であったのに、今から十年分は確保していた予算の大半を使わずに済んだのだから。

とりあえず、実行予定の艦隊演習は行われるが、使用される予算が二十分の一以下になったといっても過言ではない。

これに感謝しない？

これを何も言わずにスルーする？

出来る筈もない。

そんな振り切れたゲージの中で、林檎は決意した。

「西南様の女になる。誰になんとわれようとも、西南様の女になる！ー！」

当然それを聞いた神木瀬戸樹雷は大応援。

水鏡と穂野火を緊密にリンクし、林檎を常にGP常駐できるようにとりはかるまで指示を開始した。

燃え上がる林檎とその部下たちと対照的に、かなりの勢いで不機嫌になる水穂。

とりあえず、玲亜の子供を狙ってみては、と話をされたが「柁木の男は信用できません」とにべもない。

確かに、勝仁といい樹雷皇といい天地といい、一夫多妻が表に出すぎていてもいえる。

瀬戸もそのことを言われると苦笑いしか出ない。

そういう意味では「山田西南」は傑出した才能と悪運、そして面白い環境を持つているといえる。

林檎が取り込めればよし、おもしろオカシく関わればなおよし、これがその時点での瀬戸の思いであった。

リヨウコ「バルタの勧誘を笑顔で振り切って入国ステーションまでやってきた西南は、顔見知りのアイリによる歓迎を受ける。

既に会った当初から「アイリねえ」と素直に呼んでいたため、地球では無茶苦茶可愛がられており、その鼻屑は周辺が引くほどであった。

もちろん「私の西南ちゃん」を取られたくない霧恋と正面衝突になり、あわや入国管理ステーション崩壊か、とまで話が膨らんだところで、九羅密美守が介入、どうにか崩壊まではいかなかった。

入国手続きを引き付いた雨音を待っているところで、原作が発動するものの、結果は別物であった。

「おお！ 土田舎土辺境の見窄らしい地球からやってきた新入生がいるとはい聞いていたが、まさか西南君だったとは！」

言葉の内容はおいていて、実は非常に歓迎している天南静竜であった。

そんな彼の態度の裏は、天地との対決にさかのぼる。

彼が不慮の事故で負けとされたときに、西南だけが剣の勝負をやり直すべきだといひ募ったのだ。

それも樹雷皇に土下座までして。

どうしてそこまでするのかを聞いてみれば、西南は輝く笑顔で「この上もなく綺麗な舞をする方です。ならば剣技もまた美しいに違ひありません」と言い切った。

この言葉に感動した静竜は、勝負に関係なしで天地と剣を交えたといひ、樹雷皇も自分が選んだ人間の剣技がすばらしいに違ひないと認めた少年を高く評価した。

結果としては僅差で天地が勝ち、双方のその剣技は周囲で大きく賞賛された。

この勝負における本来発生するはずであった凝りは存在せず、静竜にとつても来歴を汚すことなくGP教員となれたわけだ。

ゆえに、いかに鈍い静竜でも「山田西南」が自分にとつて恩人であることは忘れていないし、自分の剣技を美しいとほめてくれた数少ない人間であるとも感じている。

他人の悪意に鈍感な性質ではあったが、ものが少ないだけに善意には非常に敏感な静竜であった。

「お久しぶりです、天南さん」

「何を他人行儀な。静竜でいいと言っているだろう？」

「・・・ありがとございます、静竜さん」

「うんうん、素直でよろしい!!」

ばんばんと肩をたたき静竜を、知り合いがいたことで安心した西南が見上げるといひ、原作ではあり得ない風景がそこに展開していたが、入国管理ステーションでは結構あることなのでスルーされている。

「で、誰の推薦で来たんだね？ 言ってくれば推薦人に名前ぐらい貸したのだから？」

「あ、ありがとうございます。でも、とりあえず此处に名前を並べるのはやめておいた方がいいかと……。」

見せられた書類の写しを見て、さすがの静竜も顔をゆがめる。何しろ書いてある名前が名前だ。

「神木瀬戸樹雷様、柁木阿主沙樹雷様、哲学士鷺羽」

写しをみた後で、ぱったり倒れた静竜。

「せ、せ、静竜さん!？」

「ああ、幻覚が見えるよ西南君。雨音がダツシユでこっちに来る幻覚が……。」

「この、西南に近づくんじゃねー!！」

ドロップキックで退散させられた静竜であった。

推薦人の欄で入国管理事務所がパニックになった上で、先ほどの海賊捕縛の話も相まって、西南は入学前から有名になってしまった。当然確率の偏りについても有名になっており、これで暗い学校生活の始まりかと思いきや、彼と共に生活することになったルームメイトたちは腰の強い存在であった。

ケネスとラジャウの二名によって、まじめで不真面目な寮生活が満喫されることになる。

が、この生活において、幾つか点が原作と大きく異なる。

一つ、NBが居ないこと。

原作とは違い、宇宙技術の最先端ともいえる鷺羽マシメの研究所に出入りしていた西南にとって、アカデミーの技術は割と見慣れたものであった。

逆に万民向けに簡略されていて分かりやすいとすら思ったほどであった。

そのせいで、NB型審査ユニットが必要ではなく、アイリから派遣されていないのだ。

もう一つ、西南の生体強化が必要なくなっていること。

鷺羽マシメの研究室に出入りしている段階ですでに遅いともいえるのだが、天地の覚醒と西南の告白によって三神による「祝福」が与えられており、すでに樹雷の闘士を越える強化を施されていた。そのため授業についてゆくための強化が必要なくなっているのであった。

さらにもう一つ、瀬戸の剣による監視が行われていないこと。

戦闘力においても行動力においてもふつつの地球人ではないことを知っている瀬戸は、自らの女官である「瀬戸の剣」を派遣していない。逆に「瀬戸の盾」を派遣して各団体への牽制を行っている。は、西南を政治的に利用させないためでもある。

そんな些細な違いをはね飛ばすのはキャラの濃い方々。

入国審査のあとに、虎視眈々とアカデミー案内をねらっていた柁木アイリと、アカデミーにおける保護者を自認し、虎児を守る母虎が如くに燃え上がる正木霧恋。

二人の夜叉は、どうやって西南をひっかさらうかを考え、そして暗闘していたのであった。

## 第二話（後書き）

まさかの静音味方ルート。  
というか、かなりチートW

### 第三話（前書き）

まさかまさかの非原作展開でありながら、ちょっと原作を取り込む流れがベースになっています。

## 第三話

むろん、そんなこととはツユ知らぬ西南は、寮の一室でゲームにいそしんでいた。

見た目は地球の携帯ゲーム機ににているが、機能や内容は段違いで西南を魅了していた。

中でも「L A ～ V プラスマイナス」というギャルゲーが面白すぎた。

周辺の機器に入っているAIを美少女化してナンパしたり楽しんだりすると言うもので、仲良くなると性能が上がるという得点付きであった。

すでに洗濯機や食事の転送関係の性能はマックスになっており、同じ寮生が借りにくるほどであった。

で、現在西南は謎のAI「キルシエ」を攻略中であった。このゲームの面白いところは、攻略が終了して初めて何処のAIかわかるというシステムで、攻略終盤に近づくとなんかヒントで教えてくれるのだが、未だ教えてくれる様子もない。

さすがにアカデミー製のギャルゲでも、キャラはテンプレだったんだけど、このキルシエは可愛いなあ。

何となく目の色が違うし、反応もリアルだし・・・

「あれかな、対人インターフェイスが先鋭してるって事は、どこかの受付かな？」

そうなるこれからが楽しみだなー、とか思っていたら、いつの

間にか恋愛ゲージが振り切れていた。

これで出自がわからないって、どういうこと？

そんな風に思っているところで、ファイナルアンサーが出現。

「受け入れる・受け入れない」

もちろん、受け入れるに決まっている。

ああ、何が性能アップするのかなー。

そんな思いとともに、選択をクリックした。

翌日、世間は大騒ぎになっていた。

ネットA Iアイドル「キルシエ」、第一級人権侵害を告白！！

生み出した制作者が娘をテゴメ？

若きG P訓練生との駆け落ちに至るまで！！

入学前からアイリに呼び出された西南は、とりあえず肉体関係がないことを大声で宣誓させられた上で、そういう関係は大人になってから、とアイリに釘を差されることになった。

もちろん「早く大人になってくださいね」とゲーム機越しに微笑んだキルシエを、視線だけで消滅させられるんじゃないかと言うほど睨む女性たちが居たわけだが、この状況を利用しようと考えただけの思考の幅は残っていた。

そこで、アイリが提案。

ネットの中だけじゃなくて、リアル環境に対応できる体を作ってみては、と。

試作品でちょうどいいものがあるので、使ってみないかという誘いに乗るキルシエ。

これにより、NBの代わりとなる存在が生まれた。

こんなことが起きると、やはりにわか騒々しくなる西南の周辺で、入学当初に霧恋や雨音と共に現れた事実がピックアップされた。霧恋も雨音も共にファンクラブが組織されるほどの人気者だ。

そんな二人を待らせての入国だ、こりゃひと騒ぎだと言うところで、ケネスが共同記者会見を開くことを提案した。

見る見る間に会見会場に設定されたヴァーチャル空間に人が集まり始めるのを見て、舌打ちをするケネス。

さすがにここまで集まるとは思っていなかったので、会見場のソフトを試供品ですませていたのだ。

どうしたものかと首をひねっているところで、西南が懐から取り出したメモ帳を片手に、ほいほいとパスコードを入力すると、なんとレジストが完了してしまった。

きけばこのソフトの開発元である天南財閥に知人がおり、一時的なレジストの仕方を聞いていたそうだ。

なんとという恐ろしいことかと思っただが、とりあえずスルーして会見を開始したケネスであった。

会見会場は二千人を越える人間が集まっていた。

で、よく見ると同じような顔が何人もいるところを見ると、多重ログインをして会場ソフトに逼迫を与えて嫌がらせをしようとしているのがありありとわかる。

姑息な技だが、試供品のままであったら会場が崩壊してヒドい目に遭っていたであろう。

発端が西南なだけに感謝しにくいだが、これが不幸を飼い慣らすと言うことなのだろうとも感じてはいた。

会見の中、話は恐ろしいほど綺麗にまとまった。

まず、友人の親戚のおねえさんであるアイリが起点で始まった時点で、下手な質問が不可能になった。

加え、友人の姉であるところの霧恋は、昔から不幸体質である自分に優しくしてくれた近所の憧れの姉であり初恋の人であること、その友人である雨音もまた自分によくしてくれるお姉さんである事などが纏められた。

どこからどうツツいても無難な話しか出てこず、その手が緩められたところで一つの質問が飛んだ。

「山田さん、あなたが入学前に大量の海賊が捕縛されたときいますが、何をしたんですか？」

「今回は正木霧恋さんや雨音カウナツクさんとの関係に絞った質問のみを受け付けています。関係のない質問をなされたあなた、所属の部屋番号を言ってください。」

フォロワーのため会場に隠れていたキルシエをみて、驚きの声を上げる生徒たち。

しかし質問者はそれを無視した。

「無茶苦茶大量だったらしいじゃないですか、山田さん。そんな大量に異常な量をどうやって集めたんですかあ？」

無遠慮で、それでいて暴力的な声に押し黙る周囲。

見た目は生徒だが、みだ目通りの存在じゃないことを感じた生徒

たちは、背後で通報を始めた。

完全に空気が壊れた会場の中でにつこり微笑む山田西南はこう言い切った。

「事は樹雷様が関わることです。下手なことを言つて「ZZZ」は喰らいたくありませんので、その質問はしないでください」

今まで以上の静寂が会場を占めた。

質問者もそれ以上の言葉が出ない状態で固まっている。

そりゃそうだ、質問したら「ZZZ」だぞうなんて脅されればふつうはビビるし、普通じゃなければなおさらだ。

「これにて会見を終了します」

キルシエの一言により、会見場ソフトは終了され、西南たちは現実に帰還した。

突如現れた行方不明のAインターネットアイドルは本物かとかコピーでもいいから肖像映像を回してくれとか大騒ぎになった寮室であったが、急遽西南の個人回線が開き、周辺とセキュリティウィンドウで仕切られた。

相手はアイリ。

実のところ、先ほどの会見に何人もの海賊が忍び込んでおり、先ほどの質問者も海賊だというのだ。

すでに一斉摘発が行われているので後顧の憂いはないが、この手の接触は増えるだろうから注意してほしいというものだった。

注意と言われても「この世界」をある程度俯瞰している西南にとって海賊の接触は既知のものだ。

それ故に先ほどの会見でも警戒していたのだが、全く判別できなかった。

これはいくら警戒しても無駄なので、周囲と会話するときには全員海賊だと思えと言うことだろうと逆に理解する。

それが山田西南として生活してきた彼の危険意識だった。

そのことをアイリに話すと、彼女は非常につらそうな顔をした。

何しろ、そんな環境に追いやった人間だと自分を思っているのだから。

だから西南は言う。

「アイリねえ、だいじょうぶだよ」

久しくアイリねえと呼ばれてハッスルしたアイリさんは、ものすごくめかし込んでいた。

もう、そのめかし込み具合が頂点突破して、明らかに妖気を発生させるレベルで艶が入っていた。

そんな様子で保護者席から見ているものだから、すごい勢いで周囲の空間があいている。

唯一隣に座っているのは秘書役のエルマのみであった。

彼女とてこの場にいたいわけではないのだが、この勢いのまま西南をゲットスルーしないように監視を美守から受けているため、動くに動けないと言うのが現状であった。

そんな事情と素知らぬ西南は、見知った人が保護者席にいてくれるという喜びを噛みしめており、時々小さく手を振って見せたりしてアイリのリミットを何度も突破させていた。そしてエルマの制動力を最大限に発揮させていた。

西南君もう勘弁してえ、はアイリ秘書達の合い言葉になりつつある。

そんな入学式イベントにおいて原作で起きた事件も発生していた。偽装学生的大量検挙であった。

原作と同じく新入生挨拶にでてきた西南の不運により、理論上発生しない筈のハウリングが発生。

さすがにハウリングまで予想していなかった西南がマイクスイッチを切ったにも関わらずハウリングが止まらず、入学式は散々の結果となったというのが表向き。

発見された真実だけ見れば恐ろしいまでの内容であった。

見た目もスキャン結果も人間という新入生の脳内に完全な空洞ができており、その空洞にコントロールユニットが入っていたのだ。

先のハウリングによる共鳴破壊によってその機能は失われているし、偽装学生達も二度と目覚めることはない様子だが、こうも易々とGPへの進入を果たすまでの科学力を持つている海賊側技術に空恐ろしいものを感じるアカデミーであった。

この事実は西南に知られることなく伏せられているが、原作知識のある西南は理解しており、意識無い肉の人形達に同情を感じているのであった。

この事件における差異は大きい。

アカデミーシステムの破損がほとんど起きなかったからだ。

いや、すでにシステムの破壊と再生は、トクメ鷲羽経由で先払いしている関係で、西南からの影響に強くなっているとも言えるのであろう。西南独自の危険予知活動もトクメ鷲羽から開示されているおかげか、致命的な事故やミスが激減していることも影響しているだろう。

が、やはりどうしても影響はでるし、事件は発生する。

### 第三話（後書き）

というわけで、キルシエ、ハーレムにはいりましたーw  
流石にゲーム経由というのが神代クオリティーw

## 第四話（前書き）

ごちゃごちゃとしたバックボーンを書いてしまう、心弱き民神代です。

## 第四話

毎日毎日何処かでお祭り、を楽しもうということ、西南はケネス&ラジャウと共に寮脱出を敢行。

もちろん当たり前のように警備網にひっかかり、そして恐ろしいまでに拡大する。

彼らが行った欺瞞情報がバグフィルタに通じ、異常データとなって警報ソフトに伝達されてしまったのだ。

かの都市に潜伏する海賊が一齐にテロを起こそうとしている、と偶然にも、その示唆された場所の80%までが、本当に海賊が潜伏している場所であり、20%がアンダーカバーが潜伏している場所であった。

その情報をみた情報士官は背筋を凍らせる。

なにしろ、自分たちが秘匿しているデータが、公共警報システムに公表されているのだから！！

まずい、と思ったときにはすでに管轄の警察から軍、広域捜査権をもつ一級刑事まで総動員で踊りかかる事態になっていた。

まさに「ヒヤッハー」「汚物は消毒を！」であった。

そんな事態とつゆ知らぬ、唯一抜け出しに成功した三人組は、爆発音や破壊音に溢れる町を見上げている。

西南は「派手な花火だ、ラスベガスなんて目じゃない」と思っていたわけだが、ケネスとラジャウは内心焦っていた。

見た目地域戦争が起きている町であったからだ。

はじめはマツタリとしていた西南であったが、これがお祭りではなく紛争の類と聞いて驚き、そして首を捻る

広さは広いけど、榎木家の騒ぎの方が怖かったからだ。

いやな方向にならされている西南であった。

とはいえただ立って見ているのもなんなので、近くの自販機で飲み物でも買って見物しようという話になった。

じゃあだれが払うか、というところでジャンケン開始。

結果はもちろん運の悪い西南が負け、三人分の料金を払おうと認識票をかざしたところで、三本のシユースが手元に現れた。

が、それに併せて銃声もなにもかもやむ。

彼らの第一標的である「山田西南」の所在が判ったからであった。

一瞬の静寂の後に起きたのは、今で異常の乱戦だったが、その後の起きたのは大崩壊だった。

地面が、建物が、ごうごうと音を立てて倒壊する。

勿論、西南の運の悪さの影響もあったが、実際には海賊から派遣された暗殺者「ウイドウ」の仕業でもあった。

この混乱の中に巻き込まれる西南を暗殺しようとしたのだが、彼女はの時正気を疑う光景を見ていた。

まるで、陽だまりの中を歩くように、にこやかな笑みで倒壊する建物の破片をゆっくり避けながら、その範囲から外れる西南を。

ありえなかった、信じられなかった。

彼ほどのマイナス極性の運氣ならば、誰よりも早く死亡しているはずであった。

しかし、結果は目の前だった。

あまりに正気を失う光景にわれを失った彼女は、西南の前に進み出てしまった。

彼女にとってその行為自体もありえないことだったが、目の前の

光景のせいで夢うつつであつた。

何か言わなければならぬ、しかし、何を言えばいいかも判らない、そんな混乱の中で、西南は彼女の手を引き抱き上げる。

軽い足取りで進み出た背後には、十数トンを超える構造鉄骨が崩落していた。

そう、彼女は救われたのだ。

彼女自身も見えなかつた死の運命から。

彼女は瞬間的に悟る。

今現在の自分は既に幽霊である、と。

本来の自分は先ほど死んでいるのだ。

ならば、この残りカスには何の意味も無い、と。

現場から救助した女性をにこやかな笑顔でGP職員に引き渡し、西南は寮に帰ることのなつた。

遊びに行った先が戦争状態で崩壊したとあつては、流石に遊んでいられる気はしなかつたからであつた。

ここで原作が合流する。

クレイ型の警報機による集中砲火が西南たちを襲い、それなりに不味い印が刻まれることになつたのであつた。

が、その印もキルシエによる内助の功で消され、翌日には消えているのを発見して「そういうものか」と納得した西南であつた。

アカデミーでの授業は進み、平穩な日常が繰り広げられているかのようにあつたが、アカデミーはパニックであつた。

かの「ウイドウ」が検挙されたのだ。

それも、山田西南の手によって。

検挙現場はG P職員も立ち会っているし、検挙された本人も証言していた。

さらに、その際に作られた調書は、彼女自身が作り上げたものであり、今までの余罪も含めた自白や、累計に渡る被害に至るまで詳細に記載されている、いわば裏の経済白書でもあった。

この資産価値は計り知れず、かつ、内容的価値は天井知らずといえた。

即座にアイリの手によって封印されたが、彼女自身も思うところがあり、事情聴取には立ち会えなかった。

実際に立ち会った九羅密美守は、言葉すくなくアイリに語り、以後は事務的に処理したのであった。

で、大きな問題がある。

それは報奨金であった。

海賊の大量捕縛に関しては、瀬戸が手を回したが、ウイドウに関しては、本格的な天文学的金額の報奨金が支払われることになってしまっただ。

少なくとも、1000年ばかり贅沢に遊んで暮らせるほどの。

流石に若者に与えるものではないと考えたアイリは、かげながら派遣されてきている林檎と共に経理操作を行い、架空の財団を立ち上げ、その資金へ流用した。

勿論架空なので出費など無く、流用は林檎が行うため増えるばかりになるのだが、財団理念にそう形の研究者には出資がありその返却配当を運営費に当てる事になっていた。

明らかに資金横領であったが、報酬自体を表ざたに出来ないため苦肉の策であった。

そんなもので、金銭感覚が微妙にずれてしまっただか、西南の口座に支払われた報酬は、かなりの額になっており、西南自身を驚かせた。

が、彼自身の俯瞰知識により「海賊捕縛の報酬かな？」という微妙にずれた受け取り方をしていたため、わりと簡単にスルーしていたのであった。

で、捕縛報酬とはいえ始めてのお給料、そう思った西南は実家に送金しようと考えた。

流石に全部を送ると、地球の経済が凄いいことになってしまうので何か買える程度の、という思いから数万程度に相当する為替を送るつもりであった。

そのことをアイリに相談したところ、

「お金より、西南君が心を込めた贈り物のほうがいいわよ？」

という答えを得て、鼻息も荒く町に飛び出したのであった。

西南にとって、地球で交流のあった人々は全員感謝したい人であった。

加えて、柁木樹雷の人々やその関係で知り合った人々も。

リストアップしてみて凄いい数にはなったが、逆に報酬に余裕があったので助かったとすら思った西南。

一人一人の特徴や、思いなんかをメモして、そして町を徘徊する西南であったが、そういえば一人で徘徊するのは始めてであったことに気付く。

どこに行けばいいかな、と手元の端末を弄っているところであったのはエルマ。  
未だローレライではない西南に、純粋な親切心で接近したアイリの秘書であった。

原作のようにデートする二人だったが、原作のように追跡者はいなかった。

いなかったが、監視者はいた。

キルシエ、アイリ、霧恋、雨音であった。

常に西南の安全を監視していた霧恋とアイリはまだしも、雨音が監視していたのは偶然だった。

彼女自身はあまり気にしていなかったが、彼女の口座に莫大な金額が入ってきたと顧問経理から連絡が入る。

内訳は「協力者割り当て」。

何事かと調べてみたが詳細不明。

しかしかく乱された情報のかなたに見えた影が気になった。

そこで子飼いの情報矢と共に洗ってみると、見えたものは絶望的な壁だった。

「神木瀬戸樹雷」「榎木アイリ」

が、この二人がかかわり、そして自分に莫大な資金が流れってくるそんな存在。

もう疑うことも無い、山田西南。

そして彼を追跡したところで、エルマとのデートを知ったのだった。

正直に言えば、面白くない。

かなり、面白くない。  
しかし、目を離せなかった。  
その理由もわからず。

#### 第四話（後書き）

いろいろとありますが、雨音、結構好きな人ですw

## 第五話（前書き）

さて、話の展開も恐ろしいほどにオリジナル風味となってきましたが、原作イベントも進みますw

## 第五話

「・・・あれ、鷺羽ちゃん」

「げ、西南殿」

市場の中で見つけたのは、サングラスで変装した鷺羽。

だれそれ、という顔のエルマであったが、理解が広がった瞬間、絶叫のエルマ。

勿論、一瞬で店じまいの鷺羽、エルマを小脇に抱える西南。

まるでアニメの盗賊のように息の合った二人は、ダッシュで市場を駆け抜けたのであった。

驚きで硬直したのを正気に戻したところで説得し、なんとか鷺羽が色紙を書いたことで落ち着いたエルマ。

あらゆる質問は置いておいて、とりあえず、西南は懐から取り出したのは小さな箱。

「これ、なんだい？」

「はい、いろいろとお世話になってますので、初収入の機会に、みなさんにお返しをと思ひまして・・・」

鷺羽は大いに感動した。

この世に生を受けて二万年以上、これほどの感動は味わったことはなかったとすら思ってしまったほど感動した。

すべて小物ではあったが、榎木樹雷、神木樹雷の樹雷関係者はおるか天地一家や地球正木一家、山田一家などなど、本当に全員分買

っていたのだ。

加え、本日つきあってくれたエルマにもペンダントが送られ、そしてキルシエにもイヤリングがデータと実物で送られていた。

監視していた霧恋もアイリも感動して泣いた。

本格的に泣いた。

リョウコ、バルタとしての興味で動いていたエルマだったが、この一件以降、エルマとして十二分な興味を西南に対して持つようになったのであった。

じつは西南、静竜にも贈り物をしていた。

これは金銭のかかるものではなかったが、なによりも感謝したという。

なにしろ、雨音のプライベート写真だったから。

送られてきたそれは、安物で陳腐なものだった。

サイズ違いの指輪と、チェーン。

銀色の飾り気の無いものだったが、雨音にとってそれは輝いていた。

父から送られたものでも、崇拜者から送られたものでもない。

あの少年、山田西南から、お世話になった方々にと送られたもの。

それが皆同じものであったら気にもしなかっただろう。

が、それは一人一人のことを考えて、一人一人をどう思っているかを反映したかのような贈り物。

誰に何を送ったか、誰と誰がいくらで、自分のものがいくらかまで知っている。

しかし、なんら拘りは無かった。

なんら不快感も無かった。

あるのは喜び。

湧き上がるのは喜悦。

かみ締めるのは至福。

心に鳴り響くのは喜びの歌。

「やばい、本気かも」

高まる自分の胸の内を押さえることに苦勞する雨音であった。

突然の話だが、山田西南が寮から追い出されることになった。

単純な話、山田西南をこれ以上寮にしているとセキュリティ予算が足りなくなるのが予想できたからだ。

各国からの密偵、海賊のスパイ、工員、カウンターテロ、瀬戸の盾、と。

彼を取り巻く情報の渦は、最前線も上回る密度で構築されており、それに対抗するための予算が男子寮ごとときでくめるはずがなかった。当初は哲学課による介入があり、きわめてGP有利に進んでいたらしいのだが、ここで眠った子虎が目覚めます。

哲学課のセキュリティホールに潜んでいた山田西南のアストラルコピー。

初接触の樹雷サーバーはもちろんの事、各国の秘密サーバーや海

賊サーバーに直撃し、恐ろしく被害が拡大した。

連座連合ネットワークにすら大打撃を与えた「それ」は、経済打撃よりも機密や国防に関わるすべてが打撃を受けたのだった。

さすがに王家の樹によるサポートのある樹雷では大きな被害はなかったが、連盟各国や海賊ギルドの被害は凄まじく、表沙汰にできない経済は、目に見えて左前になった。

これに逆恨みを覚える手勢は数多く、半ば意地になって男子寮を執拗に攻めることになった。

故に、男子寮は決断する。

山田西南、男子寮放逐、と。

巡り巡った西南の身柄は、一番家の広い天音の家に、サポート要員も含めてたたき込まれることになった。

メンバーは原作と同じく、

天音・霧恋・エルマ、に加えて・・・火蓮・水蓮・珀蓮・碧蓮の4女官に加えて、林檎が加わっていた。

「り、林檎様・・・何でここに？」

「恩返しのためです!!」

彼女の語る山田西南への恩は、およそ思い直す事をうながせるレベルを超えていた。

というか、樹雷の聖衛艦隊十数年分の予算規模の軽減って、個人で恩返しできるレベル？ と霧恋は内心首をひねっていたが、林檎の本気を感じているため、口には出せなかった。

そんな騒ぎの中、もう一人追加されたのが「キルシエ」であった。入学式の際に自我消滅した「肉人形」の一体を材料にした生体ロボットを制作し、キルシエの素体としたのだが、その性能にキルシエ本人も大いに感動していた。

「これで西南様にいただいた指輪をつけられますわ」

そういつてつけたのは、左手の薬指。

看取った霧恋も怒りにまかせて自分の指輪を左手の薬指にたたき込んだ。

「なあ、あれってどういう意味だ？」

「あー、あはははは」

結婚指輪とか婚約指輪の定位置だっていいのかなー、とか悩む西南であった。

もちろん、突如乱入したアイリによって指輪の位置の意味が明かされ、指輪持ちの雨音も密かに左手の薬指へ移動させたのだった。

この移動は、原作に準拠した引越しに見えるが、実は大きく違う。

何しろ男子寮からの「放逐」なのだから。

学生時代が終わっても、GPに採用されても、男子寮には帰れないのだ。

現実的な話、西南の資金があれば、居住惑星だって買えるだけの資本があるのだが、彼の手元にある金額を考えても一年ぐらいホテル暮らししても大丈夫なぐらいのものではあった。

が、セキユリティーの面もあり、樹雷資本のマンションに雨音が入居することもあるため、雨音の家に全員放り込む事になったのだ。った。

マンション雑居のイベントであった生体訓練は、すでに地球で済んでいるため、学校の授業の復習や予習をする以外は、わりと自由な時間の多い西南であったが、以前のめり込んだA Iゲームはできないでいた。

なにしろ「あれ」でキルシエを口説いてしまったのだ。

今度はどんな大物が引つかかるかわからない、と霧恋たちに禁止されていた。

結構気に入っていたゲームだったので、少し残念だったが、新たなゲームが手に入った。

ラジャウとケネスからのプレゼントで、GPサーバーを広大なフィールドに見立てたRPGであった。

導入部分で二人の補助を得て、着々とレベルをあげていた西南であったが、一般レベルに入ったあたりで二人との予定が合わなくなり、いたしかたなくソロプレイに勤しんでいたのだが、それにつきあってくれる人間が現れた。

キルシエであった。

彼女自身がA Iベースな為、素体にインストールしたソフトでの参加だったが、かなりの確なアシストが入り、猛烈な勢いでのお進撃が続いていた。

で、予定が合わなかったケネスとラジャウ。

実はキルシエをお願いされていた。

西南とペアプレイをしたいので、と。

イヤになるほど勇気があり友達甲斐のある二人は了承したのだが、離れてみれば、西南のパーティーのエンカウント率は異常だった。

統計を取ってみればわかるが、通常のエンカウント率の500倍はあり、彼の異常成長の一端でもあった。

その影響で異常なレベル上げを経験したケネスとラジャウはチート疑惑まであがったぐらいだった。

が、同行していた西南の情報が伝わると、納得が変わる。

というか、西南パーティーへ短期編入を望む声が高まった、というところで、非常に厳しい現実が立ちふさがった。

西南のレベルが隔絶してあがってしまったていて、一般プレイヤーでは同一のパーティーに入れなくなってしまうていたのだ。

このゲーム、敵とのエンカウント率が異常に悪い。

というか、基本、敵とのエンカウント自体がこのゲームの趣旨であった。

何しろこのゲーム、GPのサービスエンジニアが作ったもので、サーバーやシステムのバグを敵として視覚化させてゲームに取り込んで、発見と処理を遊び感覚でやってもらおうというものだったからだ。

だから、システムバグ自体が少ないはずなのでエンカウント自体も少ないはずだったのだが、西南によるエネミーの高エンカウントとそのレベルアップはエンジニアにとっても驚愕であった。

故にその原因を探ろうとしたのは当然の流れだが、現実的には原因不明で、しかもシステムは正常化率を上げているという事実しか分からなかったのであった。

ただ、分からないのは、いつの間にかレベルキャップが外れてし

まっていることだった。

現状レベル150で止まっているはずのキャップが、いつの間にか外れており、250までの上昇が可能になっていた。

驚きはしたものの、現状では大きく問題なしということで、流されたのだが、レベル200に達したプレイヤー達へ新たなフィールドが公開されたのだ。

エンジニアも知らない、本当の未知の空間が！！

実は、セキュリティホールを通して、海賊のネットワークにまでそのフィールドが広がっていた。

そこで駆除されるのは、バグやセキュリティホールではなく、GPの流出情報やスパイの情報等々。

GPのネットの内部でも情報の重要度による経験値変移があったのだが、海賊ネットに偏在するGP情報の駆逐という行為自体は恐ろしく重要であり、その行為自体を認識したゲームサーバーは、宝箱や財宝として情報提示し、さらにはその回収行為自体を「本当」の潜入任務とその報奨金として設定し、現実にした。

いや、正確には、ゲームサーバーを通して、キルシェが、だが。

そんなわけで、より困難な旅になったゲームの中だったが、着々と現実に賞金を稼ぎだしていることに全く気づかない西南であった。

## 第五話（後書き）

正に、西南クオリティな異次元展開 W

## 第六話（前書き）

一人、まっすぐに、ひたすらに、悲しいほど不幸になってゆく人がいます。

ええ、勿論、彼です。

## 第六話

海賊ネット内のGP情報破壊は、ギルド全体に波及しており、海賊の活動自体にも影響し始めていた。

いままでGPの活動がある程度分かった上で、安全な相手を選んでいたのだが、その事前情報がなくなってしまうため、捕縛者が増えたのだ。

逆説的に、現在潜入しているスパイに対する情報要求量は上がり、些末な情報に対しても高価な価格がつけられた。

そして総合的な情報の中で浮き上がってきたのは「山田西南」。彼のGP入学から始まった騒動に、今回の状況変化の原因があるものと判断されたのだ。

とはいえ、本人自体は「悪運」に支配されていることから、本人の動向を押さえるよりも周辺、親族を押さえる方がいいたろうというところで、彼の故郷に海賊の一部が派遣されたのだが、派遣されたか一派にとってそれは運命を転げ落ちつる一歩であったのだ。

御前会議と呼ばれるネット経由の会議でそれは発表された。

現在のダルマーギルドの経営状況と収益悪化、そしてその原因ともいえるGP情報の欠乏と収集の難航。

集めたそばから揮発する情報と情報攻撃攻撃。

すでにその解析すら出来る状況ではなかった。

集められるグチという名の報告の中で、絶望的な情報が到着した。

くタラント「シヤンク、山田家襲撃失敗

そればかりならばまだ良かった。

く伝説の海賊魍皇鬼に撃退される

たった一鑑のみで樹雷の首都を襲って帰還したという伝説が、タラント「シヤンク」を「撃退したというのだ。

つまり、事を構えて、負けて帰ってきた。

「あの」魍皇鬼を敵にして、おめおめ帰ってきたのだ。  
ダルマーギルドへ。

この事実には、ギルド幹部は絶叫した。

このバカ、何で死んでこなかったのだ、と。

あの伝説と敵対し、そして生き残れるとは誰も思わなかった。

そんな中、タラントの副官はこう発言した。

「エルマに山田西南を暗殺させましょう」

正史における状況ならば受け入れられたが、現状、GPと全面戦争になって勝てる公算が全くないダルマーギルド。

ほぼ100%の否定によって否決され、タラント「シヤンクは一切の権限を失うことになった。

これにより歴史の表舞台から消えた彼であったが、彼自身の在りようとしては正しい方向に動いたのかもしれない。

で、ネットだけに、なぜかその場に紛れ込んでいた西南のアバターとキルシエ。

どうやら敵サイドのイベント展開だと思いこんでいるようだった。

動画撮影までしてキルシエと見返してみているうちに会話で気になる部分に気づいた。

『「エルマに山田西南を暗殺させましょう」』

「キルシエ、これってIP割れしているって事かな？」

「・・・難しい判断ですね。もしかすると、これはシステムイベントではなく、PKキャラたちの会合に紛れ込んだのかもしれない」

もちろん、事の詳細を把握しているキルシエだったが、さすがに重すぎる内容なのでフィルタリングして西南に見せていたのだが、一部抜けてしまったようだった。

「・・・で、エルマさんがPKの仲間？」

「考えられませんか？」

「うーん」

腕を組んで考える西南。

彼自身の経験上、一般生活とゲームキャラが解離する事はよくあることで、リアルであって見てびっくりという感じは分かった。

というか、いわゆる前世の記憶では頻繁だった。

で、そのエルマさんがPKの仲間？

いやいや、ちょっとまで。

「・・・させましょう、って言ってたよね？」

「はい、確かに」

「もしかして、何か弱みを握られてる？」

「かもしれせん」

「そっか・・・」

明らかに勘違いの方向を加速する西南。

西南が幸せで在れば大概のことがOKな性格になってしまったキルシエ。

とはいえ、話の落とし所を読めるほど二人に経験があるわけではなかった。

そんなわけで、ふらりと雨音邸に現れたアイリに個人的な相談があると言つことで、自分お部屋につれてきた所で、例の映像を見せた。

最初は変に興奮していたアイリであつたが、その映像を見せられて真っ青になる。

「せ、せ、せ、西南ちゃん？ こ、これは、な、なにかな？」

自分のやっているネットワークゲームの話とその展開、そしていつの間にか映像が収録されていたことを説明されたところでアイリの目が光を発する。

そう、今、この段階になって初めて、最近の海賊襲撃率低下の原因が分かったのだから。

で、追いつめられた海賊が地球を襲つたのも聞いていたが、まさかこんな事になっているとは思つても見なかった。

加えて、無作為に活動していたプレイヤーたちの動きで、どれだけのGP情報が回収できたかななどを考えれば、背筋が寒くなるほどだった。

そんなアイリの姿を見て、やっと西南は思い出す。

エルマの、リヨウコ＝バルタによる山田西南暗殺事件を。

つまり、この映像はそういうことなのだ。

「まさか、ダルマーギルドですか」

「・・・気づいたみたいね、西南ちゃん」

異常に冷静に現状を把握したと理解したアイリは、今後の方針を西南とともに話し合うことにした。

完全安全宙域というものがある。

海賊出現率が100年単位でゼロという宙域だ。

ここでGP研修を行うのは必然だろう。

山田西南たちも当然のようにここで実習を行うことになった。

### 航宙実習

わりと早めであったが、さほど早すぎるわけではないのは、原作におけるカリキュラム停滞がなかったおかげだろう。

なにげに西南と静竜が仲が良い影響もあった。

むろん、それを狙った海賊もいた。

小町「キヨウ

運命の糸車は周り始めた。

自由時間には、ケネス・ラジャウ・西南によって主催された「狩り」が盛況だった。

あのRPGは、かなりGP学校男子生徒に広まっていて、寝る間も惜しんでプレイしている人間も少なくない。

もちろん、授業に影響がない範囲でなら黙認されている。

なにしろ、ネットワーク関連システム全般のシステムアップやバグフィクスが行われるのだ、反対しようがない。

加えて、アイリ理事長より「キャップレベルを超えた先にある報酬」の話も漏れ伝わってきていて、遊びでは済まない盛り上がりになっていった。

今回も高レベル者である西南を中心にフィールドを形成したところ、明らかにバグじゃないかという出現率で敵が発生しており、参加者を狂喜乱舞させた。

そして、ケネス・ラジャウに加えて、勤務宙のアラン・バリー・コーンがレベルキャップを越えたところで、新たなフィールドが開かれた。

そう、近接海賊ネットへの進入であった。

「西南！ 攻撃があたりねえ！！」

「西南くん！ フォローお願いします！！」

「うん！」

昔やっていたゲームから応用した魔法のタブをいくつか押す。

『ひらめき』『必中』『集中』

すると、ケネス・ラジャウの攻撃が当たるようになり、敵の攻撃が当たらなくなってきた。

「みんな、一撃でも良いからあてて！」

「「「「「おお！！」「」「」」

艱難辛苦の末に、強敵を西南の攻撃抜きで倒しきった彼らのレベルが、一様に大きくあがった。

その後、三体ほど倒した後で、今回の「狩り」メンバー全員がレベルキャップ越えをした。

そこで西南は、レベルキャップの先についての説明を開始した。

強大な敵、見つかる報酬、そしてその報酬がリアルマネーに変換される仕組み。

思わず声を上げる参加者たちに「シー」とゼスチャーの西南。

「この情報が外に漏れるとPKとか始まるから、絶対内緒ね？」

そんなわけで、GP学校同期会、ギルド「GXP」の発足であった。

さて、この発足の際に、一番の被害者は誰か、というと、手塩にかけた電脳士のファイヤーフォルを二枚も抜かれてシステムデーターまで破壊された隠密海賊艦だろう。

艦長の名は「タラント＝シヤンク」

艦の名は「ダイダロス」

公海上で航行不能になっているところで、GP軍に発見され、即時戦滅命令の実行をされたという。

もちろん艦長は逃亡。

何処ともしれない闇の中に隠れることになった。

## 第六話（後書き）

なんでしょう、彼ほど不幸の中心性であることを感じさせる人はい  
ますまい。  
なんまんだぶ。

## 第七話（前書き）

なんというか、私のGXPでは、無自覚に与えた一撃が一番不幸を  
与えている気がする。

うん、可愛いそうに

## 第七話

実習二日目にそれは起きた。  
エンジントラブルと海賊の襲撃。

危機感は無。

何しろ海賊に捕まったからといっても即時に殺されるわけではない。

人質にされるとか、登用されるとかいろいろだ。

加えて言うならば、リーダーの範囲外にいるGP軍の戦艦の救援もあるだろう事も予想でき、生徒も教官たちも気が抜けていた。

が、抜けていない人物達も少なからずいた。

「西南ちゃんは、西南ちゃんは私が守る！」の正木霧恋。

「ふ、ふふふふ、ふあはははは！！ 私のいる私の船に、私の生徒達を襲うとは良い度胸だ！！」の天南静竜。

二人による暴力の宴は、あまりの凄惨さに館内放映が停止されたほど。

海賊の突入部隊の大半が沈黙したのは、突入開始から10分ほどであった。

一方、「狩り祭り第二」を開催中の西南は、無理矢理コピーを転送してきたキルシェと共に海賊ネットの中で見つけたダンジョンの深部まで降りていた。

途中まで着ていたギルドメンバーも、さすがに攻撃が通らなくな

ったので、撤退してもらい、今はその再深部のマッピングやデータ取りに回ってもらっていた。

「（西南さま、どうやらそろそろボスの間ですわ）」

「（ふうん、ボスの元データって何だろっかね？）」

クローズチャットで内緒話をしていた二人の前に、巨大な達磨が出現した。

「おお！ 象徴的だな、西南」

「ええ、こりゃ、バックアップにログインした方が良くないですか？」

「いやいや、次の戦闘のために、データ取りだけにするから」

そんな会話をしながら、西南が達磨に一撃を加えた。

それが、ダルマーギルド崩壊への一撃だったとは、このとき誰も気づきはしなかった。

目の前の輸送間を攻めあぐねていた最中、緊急警報が艦内に響いた。

それはダイダルマー襲撃の警報であった。

幹部にすらその位置を知らされていない移動要塞ダイダルマーが、襲撃されたという警報だった。

「おい、誤報や訓練ではないのかあ！？」

「小町様、一級警報に誤報はございません」  
「・・・ちい、部隊撤収、即時合流ポイントに向かうよ!」  
「は!」

謎の警報、見えぬ敵。

小町キョウ撤退と共に海賊ネットとの接続が不能となり、ボス戦はネットワークエラーで中止になったのだった。

撤退までの数分の間でダイダルマーのシステムの大半が破壊され、復旧に大きく時間をとられることとなり、ギルド海賊の活動は、きわめて下火になっていったのであった。

研修中の海賊遭遇、この時点で山田西南の囹としての実力を示したといえた。

加えて、彼の提出した「ゲーム」のデータによって、ダイダルマーの予想航路と被害状況を把握したアカデミーは、一つのプランを実行することになった。

新型囹鑑「炎雷樹」の就航、そしてその艦長に山田西南を据える

ことだ。

実践研修で艦長というのは破格だったが、彼の實力を遺憾なく発揮させる為には必須と言うことで、アイリが押し通した。

もちろん、戦果は恐ろしいまでに発揮される。

艦長山田西南、副官正木霧恋、火器管制雨音カウナック、航法管制キルシエ、そして庶務全般に女官四人がついてきた。

原作のアラン・バリー・コーンは、職務中のゲーム行為が判明し、減給降格左遷の三連コンボで交番勤務に詰まっていた。実に正しい行き先といえる。

正木霧恋は驚いていた。

何しろ西南が指示する指揮が、全く問題ないどころか絶妙だったから。

戦闘指揮や警戒指示は前線士官のようだったし、戦闘後の処理も指示も全く問題なかった。

というか、手慣れすぎていた。

そんな疑問と共に聞いてみると、彼が懐から取り出したのは携帯ゲーム端末。

どうやら、一連の行動はゲームで予習していたという。

シミュレーターよりも垣根が低い、そしていろいろなパターンを実習できるという点では優れているのかもしれない、と思った霧恋だったが、一つ気になった。

「西南ちゃん、それって、うまくできたときのご褒美ってあるの？」  
モチベーションを維持するための「なにか」がある気がするの  
聞いてみたら、にっこりほほえんで西南は答える。

「霧恋さんや雨音さんが誉めてくれます」

瞬間、真っ赤になった霧恋は、あまりの幸せに気が遠くなった。  
なにより自分お名前が先に来てるのが良い。  
この感動は胸に秘めよう、そう思った霧恋だった。

実は西南、困っていた。

まず、海賊襲撃で静竜が誘拐されない。  
次に船がカミダケじゃない。  
で、三人組も配属されない。

原作と離れ過ぎだった。

で、小説版の先輩なんかも出会っていないし、その親ともパラレ  
るんるんしていなかった。

つまり、そう、なんというか、俯瞰した未来が役に立たない。  
いや、大まかには揃ってくるだろう。

でも、タラント・シヤンクの「タ」の字も出てこないのは不気味  
すぎる。

鷺羽トビにちょこっと相談したのだが、大爆笑に加えていいえ顔で答  
えた。

「あたしとしちゃあ、大歓迎だね。未来の可能性の拡散だろ？ 大歓迎さね」

まあ、そう言う人でした。

ところで鷺羽ちゃん、なんで顔しか写ってないの？

「ひ・み・つ」

女にゃ秘密があるのさ。とかいつてるけど、十中八九「福」だろつなあ。。。

## 第七話（後書き）

というわけで、いろいろとフラグが立った回でしたw

## 第八話

さて、現場実習中の出来事。

すごい勢いで「リヨウコバルタ」とニアミスが続いた。  
で、当然向こうはこっちを知っているので、ランデブーの瞬間に逃げるを繰り返していたんだけど、同行している船までは同期しないため、ボロボロと検挙できちゃう。

別名「ローレライ西南」。

とうとうこの徒名が付いてしまった。

「いやはや、この遭遇率。海賊非遭遇率トップだったんだけどなあ。」

「ま、凶鑑だし、そっちのほうがいいわよ」

雨音さんと霧恋さんの台詞を聞いて、僕は何となく原作知識を引っ張りだしてみる。

この後の展開だと、「初給料＋暗殺未遂」「オリジナル＋樹雷」、かな？

でも、原作にあった「地球襲撃」って、そんな話、家からもなにもないし。

天地先輩にでも聞いてみるか、と言うことで、公用回線が繋がるところで通話してみると、なんと、すでにずいぶん前に襲撃があったものの、廻呼さんが一人で振り返り討ちにしたとか。

うわー、原作進んですよ。

そんなわけで、初給料で再び皆さんに贈り物をと考えた山田西南は、先日エルマに案内されたマーケットを縦横無尽にかけ巡ることになる。

もちろん、先日送られなかった林檎は、今度こそ接点を言うことで、マーケットの案内を買って出て、見事宝石付きの指輪をゲットしたのだった。

密かにサイズを変更して、左手の薬指に入れていることは秘密、のつもりらしいが、鬼姫の金庫番たちは大いに盛り上がり、その乙女ぶりに興奮を隠せなかった。

もちろん、暗殺イベントは吹っ飛んでしまった。

とはいえ、心の傷ともなるはずのシャンク襲撃も経験していないので、暗殺イベントはもう少し後かな、とか考える西南であった。そんな西南から、原作通りのネックレスを贈られて、自分の好みに合いすぎるセンスにときめくエルマことリョウコ＝バルタであった。

すでにダルマーギルドからの離反を決めていたリョウコ＝バルタは、クルーの家族総出で脱出を行った。

脱出自体は成功したが、追撃が執拗に行われた。

で、その一団に遭遇したのが山田西南。

追いかけていたのはタラント＝シャンク。

トラウマ的運命の出会い、

「じゃおーーーーーん!!」

とはならなかった。

逃げていた船団をひいき居ていたのがリョウコバルタ。保護したのが山田西南。

コレは実のところ運命的出会いであった。

山田西南保護下での亡命を申し入れるリョウコバルタ。

受け入れを打診しつつ、彼女のネックレスをみて、「エルマ」が誰だったかを思いだした西南。

思わず、「ご安心ください、エルマさん」とか言ってしまった。

「……………ええええええええ!!」「……………」

画面の向こうでも驚いていたが、GP鑑も驚きで声が響きわたっていた。

彼のいいわけは「ペンダント」。

野暮ったいデザインながら、それは間違いなくデザイナーズブランド。

一目見れば解るし、強化された視覚ならシリアルだって見とれる。

とりわけ、結構前からそれを疑っていたし、アイリ姉さんにも確認していたので、みんな知っていると思っていた。

そんな話を聞いて、おもいつきり頭を抱える霧恋・雨音・リヨウコ。

まさか、そんなことになっているとは、と本気で目眩と頭痛を感じていた。

霧恋たちが再起不能になる寸前で、海賊いじめに飽きた魍皇鬼が合流。移動しつつ、まったりと受け入れ難民を含めた食事会をすることになった。

「リヨウちゃん、ひさしぶり！」

「みゃみゃーん！」

幼女バージョンの魍皇鬼を抱き上げた西南は、おでこを二人であわせて会話をはじめた。

これはクリスタルと意識を同期することで情報交換をすると言うもので、魍呼に教わったものだった。

「そっか、リヨウちゃん、おつかいだっただのか」

「みゃー！」

引き留めちゃ悪いから、お食事したらお使いに……と言ったところで、魍皇鬼はみゃうみゃうと首を振る。

「みゃみゃみゃ」

曰く、心配だからGPまで送ってゆく。

魍呼や驚羽トビからも言われているとか。

西南はその好意に甘えることにした。

わずか一鑑で樹雷を壊滅まで追いやった海賊戦艦「魍皇鬼」の護衛を受けるGP鑑という新しい都市伝説をGP本部は記録することになった。

大いに原作からずれてしまったなあ、と思った西南だったが、着々と原作以上のハーレムを築きつつあった。

雨音、霧恋、リョウコ、そして女官三人に加えてキルシエ、そして薬指の指輪をみてにやつきまくりの林檎。

西南自体は「原作より少なくて助かった」と思っていたが、現実には多く、そして濃くなっていた。

何しろ、某鬼姫の懐刀も食指をのばしていたのだから。

現在ダルマーギルドは壊滅の危機にあった。

いや、ほぼ壊滅しているため、末端の海賊の制御が利かない状態といえた。

この状態を憂慮しているのがダルマーギルドよりもGPの方だといふのは皮肉な話だろう。

なにしろ、ギルドの制御が利いている段階であればギルドとの交渉で話が済むことも、個別の海賊相手となれば話が細かく面倒になると言つものだ。

むろん、この事態を驚喜している部署も少なくない。

GP軍である。

衝突・討伐に関しては専門であることを考えれば、交渉や政治色のない戦闘は実に簡単明瞭な話だと彼らは考えている。

むろん、GP本体の意志ではない。

逆に恣意に誘導された意志であつた。

その恣意の意志こそがタラント＝シャンクであることは、観測者である西南には理解できていた。

そう、現段階で理解しており、西南を観測者だと知っている驚羽テレンスにチクリを入れてあつたのだ。

……すでに詰みの気配を焚き込められたタラントであつた。

GP軍と海賊との癒着は、GP幹部に遡ることができる。

利権と汚職は組織の習慣病だといえる。

とはいえ、癒着による情報収集という利点と外交ルート確立という点で見れば利点も大きいため黙認されていた。

が、外交相手が崩壊している現在において、その利点はすでない。

機を見て手を引いた人間には処分はなかったが、一步踏み込んだバカたちには包囲網がせばまっていた。

すでに「志村つしるつしる」状態であった。

## 第八話（後書き）

一気に九話まで掲載予定ですが、九話の調整が付かなかつたので、八話まででご勘弁をW

## 第九話（前書き）

調整が付きましたのでアップします。

## 第九話

最新鋭の砲艦「炎雷樹」は、アカデミー制作だが、樹雷の時期主力戦艦の雛形だ。

樹雷といえば「皇家の樹」「皇家の船」と思われがちだが、護衛艦や巡視艦がすべてそれではない。

炎雷樹や制作中の守蛇怪かみたけのような艦がメジャーチェンジして納入される。

もちろん、遺憾なく性能を示している炎雷樹はすでにバージョンアップの方向性すら検討されていて、そのお披露目に樹雷にきてほしいという話がGPに舞い込んでいた。

ぶっちゃけ、瀬戸からの「召還」であった。

この任務に当たり、クルーの一部に変更がでた。

副官と通信管制を霧恋が兼務していたが、キルシエを通信管制に、航法にリヨウコを入れたのだ。

女性率上昇に些か苦笑いの西南であったが、その背後で入り込めなかったことを悔しがる林檎の姿があったとかなかったとか。

樹雷までの道筋で、雲霞のごとくに現れる海賊をバツバツとなぎ倒した「炎雷樹」であったが、さすがに三桁の直接戦闘と五桁に達する捕縛作戦は予想されておらず、エネルギーの底が見え始めた。

「まずいですわ、西南様」

伯蓮の報告を聞き、眉をしかめる西南。

運行エネルギーはさすがに足りないことはないが、戦闘が後一度でもあれば完全に不足する量だった。

加えて未だ道半ば。

少なくとも今までのペース以下でも戦闘があれば樹雷にたどり着くことはできない。

一度引き返すか、と言ったところで転移反応検出。

瞬間、現れた船団をみて、西南は首をひねった。

ここにきて、なぜ「幸運鑑」？と。

大量に転移してきたのは量産型幸運鑑で、その中心が、結構めたくデコレーションされた「ダイダロス」であった。それが割と「運呼」に近い感じで。

「なあ西南」

「何ですか、雨音さん」

「・・・あれさあ、とんでもなくメタい筈なのに、何となく、辛薄そうだよな？」

「・・・ええ」

本来だったらシツコいほだめでたそうに感じる筈のその姿は、薄ら寒い切なさを背負っていたのであった。

当然、結果は返り討ち。

見事撤退させた「炎雷樹」であったが、攻撃エネルギーはすでに底をついた。

が、救世主あらわる！

「西南さま、お助けに参りました！」

原作であればリョウコ＝バルタの出番を奪った美味しい人、その名は「林檎」、鬼姫の金庫番！！

存分な補給を受けつつ、新たなクルーとして林檎を受け入れた炎雷樹は、一路樹雷に向かったのだが、もちろん途中までお同じように海賊におそわれてゆくのであった。

とはいえ、消化試合っばかったのは秘密だ。

幸福の数は決まっっていて、そのパイの取り合いこそが生きるとい  
うことだと、そんな話があったりなかったりする。

無論、西南はそれを認めない。

なにしろ圧倒的にパイが足りないし、つかめないはずのパイが沸  
いて出るような状況だってあるからだ。

いま、目の前の光景も、いわば幸運が吹き出している光景だと思  
う西南であった。

「これが宇宙最大の木、天樹よ」

霧恋の言葉にうなずきつつ、その光景を見ることができた数少な  
い地球人としての幸運をかみしめていた。

さて、原作において邪魔者の三人は、現在辺境の交番勤務なのだ  
が、自動応答のガードロボットを置いて辺境周辺で遊んでいた。

本来であれば逮捕拘禁しなければならぬ犯罪者を、地元惑星で  
倒しては報酬を得るといふ禁止されたアルバイトでウハウハしてい  
たので。

まあ、問題児だけに監視されており、今の所は拘束に至るまでの  
ことは無いという判断で泳がされているが・・・

「なあ、この治療キットってさ、つかえね？」

アランの一言に、バリーとコーンも笑う。  
邪悪に。

もちろん、このキットの使用が彼らの楽園終了のお知らせの瞬間  
だったりする。

捕縛班は、辺境への移動を開始したのだった。

偏在する幸せは、いかな様にも移動する。  
そんなことを思わせる光景が広がっていた。

原作において、「オリジナル回収の功績があったからの歓待なん  
だろうけど、今回の同規模の歓待の意味がわからない」と小首をか  
しげる西南。

そんな西南にキルシエが囁く。

「多分、撃破海賊の回収品に対する報酬ではないかと？」

その囁くが聞こえてか、にっこり微笑む瀬戸神木樹雷。

「そうね、細かい説明はおいでしておくけど、この程の回収で、樹雷全  
星系で歓待祭りを三日間ぐらい行わないと割に合わないほどの功績  
なのだけど、事が事だけにひっそりとさせてもらったわ」

ひっそり……。

思わず本当かよ、と冷や汗の西南であった。

とはいえ、ジェイオリジナルの時は、国を挙げてって表現だったけど、今回は更に上か……。

なんだろうね、と小さく首をひねる西南を見て、霧恋、雨音、キルシエ、林檎は勿論として、会場内の女性の心がトキメイテいた。

おそるべし山田西南。

転生特典は「コクポ」か!?

## 第九話（後書き）

였습니다、新境地チート「コクポ」!

・・・あたらしくねーw

さて、短期間アップはこの辺で打ち止めで、あとは亀更新になります。

ジックリお待ちくださることを期待します。

## 第十話（前書き）

えー、視点を聖な中心に切り替えて記載していますW

## 第十話

なんとなくか、色々で大騒ぎさせてもらったんだけど、例の部屋まで通されて、今回の歓待の理由が判った。

一つは、なんと、本当にジェイオリジナルが海賊からの回収品の中にあつたこと。

この一瞬で納得したんだけど、この先があつた。

「西南どの、それよりも遙かに価値のあるものがあるのですよ」

にっこりほほえむ瀬戸様は、こう言った。

「それは、あなたの得た経験そのものです」

なにか比喩的な意味があるのかな、とおもつただけど、実はそうじゃなかった。

炎雷樹が経験した戦闘経験、雲霞の如くに攻め込んできた海賊を処理しきつた指揮記録、そして……

「西南殿がその訓練のために使つたという「シミュレーター」が加われれば、訓練を終えた次の日からでも西南殿と同等の経験を生かせるということなのです。これは何にも増して素晴らしいことなのですよ?」

思わず驚いてしまった。

そして左右を見ると、霧恋さんも雨音さんも、なんだか嬉しそう

にほえんでいる。

それを見て僕も、なんだか嬉しく感じてしまった。

「西南殿、その記録を樹雷に提供していただけますか？」

「え？」

もう渡してるとか思っていたのに、と思ったのだけれども、そういえば授業で指揮記録はいわばパテント、という話を思い出した。

「えーっと、炎雷樹タイプの購入引き渡しの際にはお渡しできるやもしれませんが、そのへんは営業窓口を通してください」

よし、これで平均的対処ができたはずだ。

そう思った僕だったんだけど、霧恋さん雨音さん大爆笑、瀬戸様苦笑いが印象的だった。

笑いも収まった頃、どうやら原作維持の世界意志が働いているようだ。

着飾ったりヨウコさん、現れたバルタ王。

そして色々な騒ぎ。

リアルで見ると面白いなあ、うん。

ただ、この騒ぎの中で、僕は霧恋さんの手をそっと握った。不安そうに、寂しそうに震えていたから。

「西南ちゃん……」

僕はそっと握り続けた。

樹雷出立の日、炎雷樹は破損していなかったため、このまま出立となった。

たぶん福の生成が間に合っていないんだろう。

加えて、ネージユちゃんとも会わなかった。

これって、なにがまずかったんだろうなあ、と考えただけど、いまいち思いつかなかった。

樹雷からGPに帰還したところ、GPの営業部から感謝のメールが山のように来た上で、今回の戦闘指揮記録のライブラリー登録の督促が来た。

膨大な量なので霧恋さんにお任せしてたんだけど、まだ終わっていないらしい。

完全にアップロードできるまでロックされているということですが、すぐ期待が高まっているとか。

併せてキルシエの作った戦闘指揮シュミレーターもアップロードしたんだけど、なぜか権利者の名前が僕になっていた。

「キルシエ、自分の名前でやってよお」

「旦那様。それはだめです」

頑固一徹のキルシエに、僕も大弱り。色々と話し合って、入ってくる窓口を一元化しただけで、あとはみんなに分けることにした。

本当は夕食に誘っておしまい程度にしようと思っていたんだけど、キルシエの猛反対でその方針にした。

なんでそんなに反対かな？

そんなことを悩みつつ、久しぶりに座学に出席した。

現場実習の合間にその知識と座学をすり合わせて実際の知識を交換しあうという目的があるらしい。

僕も久しぶりにケネスとラジャウに会って、楽しかったんだけど、なぜか僕らの周りに人垣ができた。

なんだろうね、と思って周囲を見回してみると、何となく知っている気がする相手を発見。

でも、ぜんぜん知らないのに。

なんでかな、と思っているところで、彼女が前にでた。

「あ、あ、あの、山田君、お話聞かせて貰っても良いかしら？」

「え、いいけど、君は？」

「え、うん。あの、私の名前は

美希＝シユタインベック

って言うの」

瞬間、様々な違和感の正体を理解した。

実習艦が違う理由、ダルマー崩壊時期の変異、幸運艦出現のずれ、そして、いままで美希「先輩」に会わなかった理由。

つまり、そう、早かったのだ！

「あ、あの、山田、くん？」

「あ、あああ、ああ、うん、よろしく、シュタインベックさん」

そりゃ、デジャブの一つでも感じるだろうさ。

彼女は言い換えればキルシエと同じ存在。

もちろん、彼女自身は人間である意識が強いので、そんな風には考えていないけど、実際には肉体を持ったピノッキオ。

毎日見てる存在と全く同じ存在がいるのだから、判らないわけがなかった。

「あの、わたしたちも、わたし、カリーチ」

「わたし、ミランダ。美希のチームメイト！」

「あ、あの、俺はケネス。西南のチームメイト」「ぼ、ぼ、ぼくはラジャウ。西南君の友達です」

わっと何か盛り上がった、雰囲気の中、彼女を見つめる。

久しぶりに俯瞰知識が強くなった。

彼女は、シュタインベックの名前よりも「真田」の名前のイメージの方が強かったから。

「あ、あの、山田君。私の顔になにかついてる？」

「え、あ、ごめん。うちのクルーの一人に雰囲気似てるから・・・」

「へえ、私に似てるの？」

「なんだか嬉しそうにほほえむ美希さん。」

「いや、シユタインベックさんって考えてないと不味いかな？」

「おいおいおい、あんだだけお姉さま方を侍らせたハーレム職場にしながら、同期生まで手を出そうってか？ 西南」

「西南君、その発展性は認めますが、少なくとも借り場を広げないでほしいですねえ？」

「ケネス、ラジャウ、そんなんじゃないってば！」

「思わず否定したけど、将来的には、否定できないかもしれない未来があること走っている僕だった。」

「ともかく、俯瞰知識での心の成長要因なんか知らない。」

「彼女にはそんな危険は知らない。」

「真田博士、いや、マナダ博士にだってそんな試練は知らないはずだから！！」

## 第十話（後書き）

というわけで、原作との時間ずれの意味が知れました。  
まあ、当然といえば当然でw

## 第十一話（前書き）

とうとうわけで、西南の日常の一面です

## 第十一話

とりあえず、一G P生徒に出来る事なんて大きくないので、マント驚羽ちゃんに相談することにしたんだけど、現在面会謝絶中途のことだった。

うわー、つまり福の生成佳境って事ですかあ。

「どうしたんだ、西南」

自室でうめいていた僕を雨音さんがのぞき込む。

「えーっと、ちょっと友達の相談ごとがありまして・・・」

「なんならあたしが聞いてあげるけど？」

にっこり微笑む超美人。

何でもないとかモツタイナくていえません。

「えーっと・・・」

とりあえず、問題なさそうな話に切り替えないと・・・

「いま、あたし向けの内容に話を切り替えようとしたら？」

さすがに怖すぎです、その直感。

「ま、男の子が女に相談できない内容っていえば、それなりに理解してるつもりだけど？」

「雨音さん、さすがに勘弁してください」

「・・・ふふふ」

色っぽく笑われてしまいました。

「で、相談できる内容なの？」

「・・・実は、友達と実習経験の情報交換会をする事になったんですが・・・」

「へえ、懐かしい話ね」

にっこり微笑む雨音さん。

よし、どうにか矛先がそれた！

「で、・・・ああ、そうか。西南だけ寮を追い出されてる、と」

「ええ。バーチャルでもいいんですけど、なんだか味気ないという話になりました」

「判らないでもないわ。私もあのころの友達って、今でも続いているし」

「ああ！ 美星さんとかマシスさんとかノイケさんとか・・・あれ、どうしました？」

ぼったり床に倒れる雨音さん。

なんだか目が虚ろですよ？

しばらくして珀蓮さんがお茶を入れてくれたので、持ち直した雨音さんだけど、なんか憔悴している感じ。

「・・・私の昔は良いけど、どうする、西南。なんなら家に呼ぶかい？」

「それは考えましたし、ケネスもラジャウも乗り気なんですけど、

美希さんたちが・・・」

「美希ってだれ!?」

なぜか現れた霧恋さんを合わせ、三人に詰め寄られてしまいました。

とりあえず、同期で、女子生徒三人組の一人って説明すると、恐ろしい早さで端末を操作し始める霧恋さん。

「霧恋・・・」

「まって・・・あ、わかったわ。美希シユタイムベック。背後関係は真つ白。いえ、白すぎね?」

「白すぎて、データがないってことか?」

「いいえ、品行方正すぎる、まるでテンプレート」

さすがですこの二人。

でも、疑念は晴らしておかないと。

「霧恋さん、雨音さん、そこまでにしておいてあげてください」

「え?」

「彼女は、たぶん、僕の想像通りならキルシエと同じです」

「あ・・・」

経歴がきれいなのは当然。

それは意識ある、生命となったAIの宿命だから。

「西南ちゃんは、どこでそれを?」

「キルシエと同じ感じだったので」

「・・・なるほど、な。だからうちにつれてくることを迷っているんだな?」

「はい」

うーんと腕組みの僕たちに、ふらりと現れたキルシエが微笑む。

「私はそんなにへまじゃないですよ？」

「でもさ、なんか、お互い感じ会うものとかあって、そのせいで記憶処理とかが崩れたら・・・」

「アカデミーならそれも個性なんじゃないですか？」

何となく沈黙。

ともあれ、それでいくことにした僕たちだった。

「ところで、西南」

「なんです？」

「本命の相談は、なんだ？」

「・・・ぐ」

そらせていなかった！！

どうしよう・・・って、あー！！

「えーっと、霧恋さんもいますし、ちょうど良いかもしれません」

「なに、私に関係あるの？」

「えー、直接的は関係ないんですけど、間接的には」

「「「「？」」」」」

全員で疑問顔だったので、矛先が飛び散るようなネタを一つ。

「美希さんって、雰囲気や言動、というか気配そのものが、霧恋さんのお母さん、月湖さんにそっくりなんで・・・」

「そのことをお母さんに相談しようとしたの？」

「はい」

ちよつと考えたあと、霧恋さんは再び端末を操作し始めた。先ほどとは違って雨音さんや珀蓮さん、キルシエはおもしろ半分って顔をしている。

「あー・・・うん、なんというか」

困ったような顔の霧恋さんは、頬を指で掻いている。これって、言うべきか言わないべきかって顔だ。

「言いづらいことですか？」

「んー、他人の話だったらおもしろ半分で推理できるんだけど、ちよつと気まずいわねえ」

そついいながら、霧恋さん推理開陳。

まあ、原作知識とあまりズレのない推理内容だったけど、一つだけ違っていたのは、未だマナダ博士と月湖さんに重いが通じあっている節があるかもってところ。

まあ、確かに原作に書かれていないだけかもしれないし。

真友であるところの海、もしかしたら、マツドなお父さんが出来るかもな、ガンバレ！

「うっわー、じゃあ、あの美希って娘は、マナダ氏の愛の証？」

「どちらかと言えば未練の象徴では？」

「・・・でも、記録では人権侵害と言うよりも、積極的に娘として受け入れているようですよ？」

とかなんとか、乙女会議が開催された僕の部屋。居づらいつたらありゃしない。

「こらこら、そういう話は別の部屋でしなさい」

霧恋さんの一声で、乙女会議は移動することになった。

「西南ちゃん、もしかして、西南ちゃんの初恋ってお母さんかしら？」

んー。実在の人じゃ不味いかなあ。

でも清音さんはあつた事ないし。

・・・あ！ 良い人発見！！

「レイアさん、が初恋だと思いますよ？ あの人には散々世話になりました・・・」

「ふーん、そう、わかった」

恐ろしいほど淡泊な返事とともに、霧恋さんは僕の部屋から消えた。

やっべー、なんか押しちゃいけないスイッチ入れたか!?

背筋が寒くなる僕だった。

翌朝の朝食は、天地先輩のうちの味とそっくりだった。

あと、霧恋さんの笑顔が怖かった。

発言には気をつけよう……(配点……点)

第十一話（後書き）

キリコちゃんにはマンデルですw

## 第十二話（前書き）

えー、今回いろいろと出る話は全て捏造ですW

## 第十二話

週末、研修情報交換会を雨音さんの家で行うことになった。

というか、僕がこの家に下宿していることがバレて、ケネスとラジャウに殺されるかと思っただけど、「西南の部屋に遊びに行く」がイコールでつながれた瞬間、親友となったらしい。

それはさておき、セキュリティレベルが高すぎるこの家、結構面倒な審査があるので、あらかじめパスを渡そうと思っただけど美希さんに止められた。

「なんで？」

「盗難の危険なんか味わいたくないもの」  
「なるほど」

思わずなつとく。

雨音さんはもとより、霧恋さんなんかのファンクラブは恐ろしくいろいろと猛攻があつたし。

一応、学校教師だった頃は下火になったんだけど、今は炎雷樹のクルーなので、接点がないと大騒ぎ。

最近では「なんでもいい」という泣きが入ったので、それと無く隠し撮りして配布したところ、「西南神」とかいう裏サイトが出来たらしい。

かなり迷惑なので名前は変えてもらったけど。

それはさておき、本日おいでのみなさんは、思いの外着飾ってる。美希さん、カリーチさん、ミランダさん三人は、こう、平均値の

高い格好というのが正確な格好だと思う。

逆にケネスとラジャウは、こつ、ダメに張り切りすぎだ。

「ほ、ほ、ほんじつはおまねきいただきありがとうございます！」

「

とか何とか言っただがちな状態で花束なんて持ってきて・・・。

「一応、やりすぎだとは言ったのよ？」

カリーチさんの一言は二人に聞こえていない様子。

「とはいえ、私たちもかなり頑張ったけど、正解だったみたいね」

ミランダさんの視線の先には、につこり微笑んで花束を受け取る玉蓮さん。

無駄に色気を出してるし。

「ようこそ、カウンタック別邸へ。主からも歓迎するとの事付けを受けております」

ケネス、ラジャウ、目がハートだよ？

「山田君、この家、メイド付きなの？」

美希さんの言葉に、思わず視線が泳ぎます。

「えーっと、あと三人ほど居ます」

「「「へえー」「」」

なんだろう、すごく不安を感じる視線だなあ。  
というか、四人とも僕のメイドじゃないし!! きいてる!?

「くくへえー」「」

とりあえず、泣いて頼んだおかげか、雨音さんもいつもの格好じゃなくて、結構フォーマルな格好だった。

あと、リヨウコさんもエルマの格好で。

霧恋さんは良家のお嬢様って感じ。

・・・実家は岡山の田舎ですが。

「くくくくおじゃまします」「」「」

「あー、いらっしやい」

につこり微笑む雨音さんは、なんだか原作の人狩りでエルマさんが化けた雨音さんみたいに思える。

・・・ん?

本当に変だな。

まさか・・・

「あー、西南くんにはバレちゃったみたいよ?」

と、変な口調の霧恋さん。

「あっちゃー、もうちょっともつかと思ったのになあ」

と、男気ある口調のエルマさん。

「ふふふ、良い観察眼ね」

妙に艶っぽい感じの雨音さん。

・・・あー、そういうことね。

他人の姿をエミュレートした変装。  
予感通りの結果でした。

どうやら僕のチームメイトにサプライズ、ということらしい。  
そう、こういう実習研究のデータ交換や授業で組む仲間を「チームメイト」っていうらしい。

基本、炎雷樹中心の僕には縁の少ない話なんだけど、僕を含めた  
六人で1チームとみられるらしい。

ということ、僕の部屋に移動したところ、やっぱり広いらしい。  
たしかに、この部屋に越してきたとき、地球の自宅が全部はいる  
広さだっと思ってたし。

それはさておき、予備のクッションやらテーブルを出して研究交  
換をしたけど、やっぱり僕のデータは異質だった。

「さすがに、見習いで艦長はふつつ居ねえな」「ですが、艦長であ  
ることの意味というものを読みとると、すごいデータですよ」

「はあ、そっか、なるほど。補給ってやっぱり重要ね」「というか、

戦時中で特攻でもしない限り、こんだけ消費しないって」「みんな、着眼点が違うわ。消費装備品の欄、ほら」「」「」「なんでこんなに使っていないの!」「」「」

「いやいや、可動部分の消耗が恐ろしいって」「」

いつの間にか僕のデータの分析会になっていました。

「」「」「」「どういこと?」「」「」「」

えーっと……。

「それは、恐ろしいまでに機敏な繰船で攻撃を避け、反撃していたから、よね?」

お茶のポットをもって雨音さん登場。

雨音さんはリモコンを操作して、スクリーンを展開。戦闘の一部を再現表示した。

その動きをみて、ため息をもらす一同。

「まあ、ふつうの人間にはむりだけど、これに近い動きを再現させられるのが、次期主力戦闘艦の実力よ。まあ、西南はそのテストベツトね」

「」「」「」「へえー」「」「」

指揮記録と動きについて見比べたり解説したり……

「まるで、士官学校のブリーフィングですね」

「」「」「」「正にそれだから」「」「」「」

「え?」

助けを求めるように雨音さんをみると、不思議そうな顔。

「もしかして、そういう意図じゃなかったのかい？」

あ、れー！ー？

現実の話、西南、いわゆるトップエリートが人員を集めて勉強会をしようというのは、その主格の人材集めに相違無い。

そういう意味では士官学校の主席成績者やその友人関係による勉強会は「軍閥」の一部といえる。

逆説的に、西南の記録ログの開示は「こういう方針で戦ってゆくからついてきてくれ」という宣言と言っても良い。

だからこそ、真剣に討論しているし、船体運用についての非常識なまでの性能とそれに求められる技量に戸惑っていたのだから。

そんなことを説明されて、感心していた西南をみて、彼らはかなり肩の力が抜けた。

こちらの意図はまあいろいろだが、西南には野心的な意図はなかったとわかったからだ。

もちろん、そのような野心的な方向性も歓迎なのだが、時間的にはもう少し学征していたい気分もあったから。

「それで雨音さんの解説が詳しくかったですねえ〜」

「そう考えていなかったのは西南だけだって」「そうですよ、西南

君。僕らはこれから西南軍閥の一員か！？って戦々恐々だったんですから」

「ごめん」

素直にあやまる西南に、周囲は自然な笑いであふれていた。

「でも、この資料はすごすぎね。パテント資料なんだろうけど、身につけるだけでもスキルアップ間違いなしだわ」

美希の一言に全員が真剣にのぞき込んだ。

「みんなは操船課志望なの？」

あまりの真剣さに思わず聞いた雨音だが、全員が肩をすくめた。

「西南から声がかかれば、一員になるっすね」「西南君が誘ってくれば、考えます」「山田君、誘ってくれる？」「わたしはいきたくないな」「ちよっと興味ありますね」

あまりの好評に、胸が熱くなる西南。

「「「「だって、お給料よさそうだし！」「」「」」」

「それがよ」

思わず倒れた西南だが、それが冗談だともわかっていた。

「ま、給料は別にして、この勉強会は続けましょうね、山田君」

## 第十二話（後書き）

というわけで、パレレルフラグが立ちましたw

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8078z/>

---

天地無用GXP 山田西南に転生

2012年1月6日02時11分発行